

(様式第1号)

令和5年度第2回文化推進審議会 会議録

日 時	令和6年3月18日(月) 16:00～17:30
場 所	市役所東館3階 中会議室
出席者	会 長 加藤 義夫 委 員 平井 章一 委 員 枝元 益祐 委 員 岡 泰正 委 員 西本 望 委 員 桑田 敬司 委 員 ウイルソン 恵 委 員 藤田 美代子 委 員 田嶋 修
事務局	上田企画部長、柏原政策推進課長、井村政策推進課係長、正好政策推進課員
関係課	木野市民センター長、鈴木図書館長
会議の公開	■ 公 開
傍聴者数	0 人

1 会議次第

(1) 開会

(2) 議題1 令和5年度「芦屋市のまちづくりについての市民意識調査」にかかる調査結果報告及び令和6年度調査内容の協議について

議題2 「文化推進基本計画」の「第5次総合計画（後期）」への統合について

議題3 その他

2 提出資料

資料1 芦屋市のまちづくりについての市民意識調査調査結果報告書（文化関連抜粋）

資料1-2 文化芸術推進基本計画（第2期）（抜粋）

資料1-3 第5次芦屋市総合計画（前期基本計画施策評価報告書）

資料2 芦屋市のまちづくりについての市民意識調査調査結果報告書（概要版）

資料3 「文化推進基本計画」の「第5次総合計画（後期）」への統合について

資料3-2 計画統合の時系列イメージ図

資料4 社会教育機関の移管について

3 審議経過

＜井村政策推進課係長より資料1、資料1－2、資料1－3説明＞

(加藤会長)

ありがとうございました。何かご意見のある方はいらっしゃいますでしょうか。

(西本委員)

資料に、標本誤差や標本数という表現が出てきます。最近の研究では、人や哺乳動物を扱う際には標本という表現はふさわしくないとされています。標本誤差でしたら標準誤差という言葉が別にあり、標本数であれば調査協力者数と学会などでも表現します。統計上の表現としては問題ありませんが、誤解されてしまうこともありますので、表現の仕方を検討いただければと思います。

(加藤会長)

ご指摘ありがとうございました。

(事務局)

事務局から委員の皆さまにご意見を伺いたい点があります。文化推進に関する国の方向性では、「社会包摂」や「多様性」が、大きなキーワードとなっています。一般に思い浮かべる「アート」などの文化にとどまらず、もっと文化を幅広いものと捉え、生活文化などを通じてつながり作りをしていくことが大事であると事務局としては考えていますが、この点において何かご意見がありましたら、いただけますと幸いです。

(加藤会長)

つながりとは具体的にはどういうイメージで考えておられますか。

(事務局)

実際の市民主催の文化活動の事例で申し上げますと、本市の補助金を活用したもので、「アトリエ たいようのした」という取組があります。この取組は、子どもたちと公園で、青空の下で絵を描いたり、廃材を使って工作をしたりするのですが、アートを通じて近くの子どもたちが集まり、またそれに付随して保護者の方も集まり、継続的なつながりの場となっていたということがありました。この取組のように、きっかけはアートでも生活文化でもいいのですが、ソフト面を生かして、それを中心に人々が集まる場が作られていくということが大事だと思っていますし、場をつくることが多様性を認めることや、社会包摂につながっていくのではないかと考えています。

(加藤会長)

ありがとうございます。美術と音楽をつなげるとか、音楽と文学をつなげるといったジャンル横断のことを指すのかと思っていました。例えばルネサンス クラシックス 芦屋ルナ・ホールや市立美術博物館が連携して取り組むことで、多様性をクリアできるかと思ったりしたのですが、今のお話ですと、ワークショップのような取組の意味合いが強いですね。

(枝元委員)

アンケート項目について、少し漠然としていてイメージがつかないのですが、事務局で念頭に置いていることは何かありますか。

(事務局)

事務局がイメージしているものの1つは、例えば「あなたは家庭や職場、学校以外で人とのつながりを持つ機会がありますか」というような質問項目です。例えば「文化を通じて人とのつながりを持つ機会がありますか」という質問ですと、「文化はアートである」と認識している市民の方からうまく回答が引き出せないのではないかと考えています。実際は、生活文化などを通じて人とつながっていても、それが数字として反映できないのではないかとこのことを懸念しており、事務局案としては、「文化」ではなく「つながり」といった言葉を選択しています。

もう1つは、「あなたやあなたの周りの人は祭りやイベントなどの文化事業に参加したり、交流したりする機会がありますか」というような質問です。以上2つの質問をもって何か分析できないかと考えています。

(加藤会長)

文化というものが、芸術のイメージに限定されてしまうことを避けるための問いかけだと思いますが、逆に抽象的なイメージが強いので、具体的な事例を出した方が答えやすいのではないかと思います。それぞれの文化の概念は、世代によっても随分変わりますので、その辺を踏まえると、具体的な事例を出されたほうが、「あ、こういうことも文化に当たるから、私は文化に参加しているんだな」ということにはなると思います。どうしても文化・芸術というと非常に敷居の高い、ハイアートのようなものと思われる方も多いので、食文化やまちづくりといったものも文化の精神活動の1つであると受けとめてもらうには、複数の事例を出し、事例に当てはまることをしたことがありますか、今やっていますか、そういう活動で他の人とのつながりがありますか、といった質問の方が回答しやすいのではないのでしょうか。

(事務局)

ありがとうございます。具体的な文化の例を入れるかどうか、また文化の定義についても入れるかどうかも含めて検討させていただきます。

(枝元委員)

この調査は量的調査で行いますよね。文化というものが抽象的であるため個別の事例を出すとのことですが、その事例は事務局が想定して出すことになると思います。そうすると、事務局が想定していない部分の回答が拾えない可能性があります。一般的に学術調査をするときには、第1段階として質的調査、例えば「あなたが思う文化は何ですか」とか、「過去のライフイベントで人とのつながりを感じたのはどんなことですか」というような質問をして、こういうつながりや活動があるのだなということを把握した上で、第2段階で量的調査に入っていきます。行政は学会ではありませんので、そこまではしなくていいと思いますが、ただどんな事例を用意するのかを考えるのは難しいと思います。お祭りやイベントなどの文化は捉えられるのですが、例えば、「休みの日にぶらりと散歩をして、まち並みがすごく居心地よくて気に入っている」というのも、まちという共同体への所属意識のつながりだと思いますし、それがまた住みやすさとか、自分の住んでいるところへの愛着心として返ってく

ることもあると思いますが、そういった回答が拾えない可能性があります。もしかしたらワークショップおいた方が実りのあるアンケートになるのではないかというところを検討する価値はあるかと思います。

(加藤会長)

ありがとうございます。資料1の119ページの問26「過去1年間で文化的活動の有無」というところで、「文化的なコト・モノ」の例示がありますが、今の時代では「写真撮影」などはほとんどの人たちが毎日スマホでしていますよね。「自然体験」というのも、「まちを歩いて感じる自然」という意味合いで示していると思うのですが、その他のことまでどう膨らませていけるかが課題ですね。想定外のものが取りこぼされてしまうのは避けたいです。限界芸術的な意味で、回答は非常に多様なものになると思います。アンケートの仕方が非常に難しいですね。

(枝元委員)

事務局で用意した事例に当てはめるのではなく、ある意味エスノメソドロジーで何が出てくるかが分かりませんので、まずは「文化とは何か」を回答してもらい、そこから例を出してくるということですね。ただし、それを3,000人レベルでやるのは難しいと思いますので、最初に20人や30人程度でピックアップして、質的調査でパイロット調査を入れるというのもありかもしれません。

(加藤会長)

非常に貴重な意見だと思います。最初にパイロット調査で任意の人たちに聞くことで、事務局で気づかないところを気づかせてもらうというのは、多様性という意味で広がりを持っていると思います。

(事務局)

ありがとうございます。3,000人規模で調査しようとなると、どうしても回数の制限がありますが、本市では市政モニターという、地域や年齢等を考慮し偏らないよう選任された100人の市民の方に、年に何回かアンケートに答えていただくという制度があります。例えばそれを活用して、先ほど委員がおっしゃったようなことをお聞きするのは可能かと思います。

市政モニターは別の所管が実施しており、4月から動き出すという形になりますので、今後話を進めていくことにはなりますが、事務局としては、文化をどのように捉えるかによって、回答結果が大きく変動することを懸念していました。毎回同じ方にアンケートを答えていただくのであれば同じ感覚で回答が得られるかもしれませんが、3,000人はその都度無作為抽出しますので、回答される方の捉え方によって数値がぶれてしまうおそれがあります。私たちはどうしても計画を作る上で指標を定め、その数値が3年後にどう変化しているかを見ますので、回答者によって大きく数値が揺れ動かないような指標にしたいという考えがそもそもありました。

とはいえ、国の方向性で、本当に様々なものが文化であるという考えがある中で、後の議題にも関わりますが、文化推進基本計画を総合計画と統合しようと考えた1つの理由に、文化を通じたまちづくりを意識できないか、ということがあり、文化を通じてまちづくりが進んでいると感じられるような指標を考えたい時に、人のつながりを捉えられたらと考えました。

本日、皆さまよりご意見をいただいた上で案を作成し、来年度の審議会でお示しできたら

と思っていましたので、本日中に全ての方向性を決めなければならないということはありません。先ほどより、委員の皆さまの忌憚のないご意見を頂戴し、事務局としては大きなヒントをいただいたと思っています。今後、どのような手法で進めていくのかは、またご相談させていただくことになりますが、事務局のみで指標を考えるのではなく、市民の皆さまからのご意見を聞くことを選択肢に入れるのも良いと思いました。ありがとうございます。

(岡委員)

アンケート調査対象の3,000人は、若い方はどのぐらいから、年配の方はどのぐらいまで、といった年齢の縛りはありますか。

(事務局)

先ほど、無作為抽出と言いましたが、層化無作為抽出になりますので、18歳から80代までの方で、過去の回答率や、まちの人口比率、男女比などを鑑み回答者に偏りがないようバランスをとって行います。

(岡委員)

今、時代は大きく動いています。実際に芸術大学でも、コンピュータで絵を描くメディアアートに向かう人や、映像や演劇などを専攻する学生が多いのです。これまでの絵画や彫刻、建築といったものに縛られない、少し混沌としている状態が芸術大学の中にもあります。言ってみれば昔ながらのオーソドックスな絵画を描く人は年配の世代になっているんですね。若い世代の人たちは、ゲームを作成したり、コンピュータで絵を描いたり、自分で映像を撮って編集してビデオアートを作ったりしているわけです。漫画やアニメーション、ゲームといったメディア芸術が主流になりつつありますし、大学もその流れに合わせて変革していかなければなりません。芸術大学でさえ、昔ながらのことだけをしていては駄目で、新しい文化を求めている学生に教授がそれを教え、対応していかなければならないということです。

今回、「芦屋市の文化とは何か」という根本のことが問われていくことになりますので、あらゆる世代のターゲット層に対し、その人たちが自分の好きなものを答えられるようなアンケートでなければ、上滑りのものになってしまい本質を逃してしまいます。今は小学生や中高生でも当たり前映像編集というアートを行っていますし、時代とともに表現媒体が変わってきているということ、今はつくるアートと編集するアートが混在している時代だということ認識しておかないといけないと思います。

(事務局)

ありがとうございます。おっしゃる通り、世代に応じて興味のあることも全然違ってきますし、やることもどんどん変わっていきます。それこそ、多様な世代に対するアンケートですので、資料1の119ページの事例は、若者が見れば少し前の世代の文化を指していると思われるかもしれません。そのあたりについても配慮して考えていきたいと思っています。

(加藤会長)

ありがとうございます。芸術大学や美術大学でもサイエンスアートやデジタルアートが人気ですし、私が勤める大阪芸術大学では、キャラクター造形が一番人気で倍率も高いです。従来の絵画や彫刻、工芸という美術学科はそれほどでもない状況になっており、時代が変わってきているのを感じます。アーティストになりたいから芸術大学に来るのではなく、企業もアート思考やデザイナー思考、またそれよりももっとぶっ飛んだ思考を求めているという

ところもあり、卒業生の就職先も以前より圧倒的に普通の会社に就職することが多いです。

資料1の14ページで、「今の場所に住み続けたいか」という定住意向を問うものがありますが、年齢が高いほど定住したいといった結果があります。いわゆる芦屋ブランドのイメージの結果だと思いますが、まちづくりという意味で言えば、高い年齢層に定住されることで、将来的に人口が減っていくというのは明らかだと思います。逆に言うと、ほかの都市から、芦屋に移住したいというブランドイメージをつくらなければなりません。それこそ10代、20代の人に移り住みたいと思うようなまちづくりという視点で、魅力的なものを考えた時に、それがアートや文化のようなものではないかと思ったりします。若い人だって、仕事が一番重要ですので、雇用の有無が大きく響くとは思いますが、一度住んだらずっとここに住み続けたいといった魅力的なまちづくりという観点では、文化や芸術が非常に重要なファクターになるだろうと思います。その辺のことも含めて何かアンケートで引き出せたらと思ったりもします。

(桑田委員)

文化といいますと、やはり多少は限定的になってしまうのはやむを得ないかと私は思っています。新しい文化は、我々のような世代より、もっと下の世代の方が意見を書いてくれればと思うのですが、このアンケートには記述項目はないのでしょうか。

(事務局)

記述式の部分もございます。

(桑田委員)

資料1の119ページで、「鑑賞も、活動もしていないし、興味もない」人が16%いるわけですが、この人たちが、普段何をしているのかを聞くことができれば、新しい、現代の芦屋市民の文化を我々が知ることになると思います。「我々が思う文化は例えばこういったものですが、それ以外にもありましたらどうぞこちらに記載して教えてください」という設問など、市民の方が興味を持っている文化をピックアップできる設問を増やしてみてもどうでしょうか。

先ほど事務局の方がおっしゃったように、数値がぶれてしまうのが怖いというのであれば、昔ながらの文化は先に定義しておいて、それ以外のフレキシブルな文化はまた別項目で聞くと分けておいてもいいかもしれません。

(事務局)

「鑑賞・活動はしていないが、興味はある」という回答の方も結構いらっしゃるのですが、それがなぜなのか、ということがアンケートでは聞けていないといった話も内部ではしていました。先ほど桑田委員がおっしゃったように、はっきりさせる部分とそれ以外を分けることについても検討していきたいと思います。

(加藤会長)

デザインマネジメントの世界では、マーケットリサーチはするのですが、広告代理店などの顕在的なニーズは分かっているので、アンケートをする際は、潜在的なニーズをどれぐらい引き出せるかを考えます。桑田委員がおっしゃった、16%の人が何をどう思っているかということを顕在化させる工夫されたらいいのではと思います。

(平井副会長)

桑田委員や、事務局のお話にもあったように、「興味はあるけど活動していない人」は結構な数字になりますし、こういった方々が能動的に動いてくだされば、かなりの数字になります。そこを掘り起こすためには、やはり理由を聞くべきだと思います。

また、桑田委員や加藤会長のお話にもありましたが、今、文化の概念は大きく広がり、多様化していますので、ある程度の「こういうものを芦屋市は文化として考えています」という例のようなものは必要かと思います。漠然と、あなたは文化に興味ありますかと言われても困りますし、資料1の119ページで捉えているような項目はもう少し増やしてもいいと思います。一方で、「あなたにとって文化とは何ですか」といった項目があれば、思いがけない答えが出てくるかもしれません。

(事務局)

ありがとうございます。市政モニターへの質問項目の中に入れることができるか検討したいと思います。

(岡委員)

先ほどの発言に少し補足してもよろしいですか。私はいろいろな市の美術展の審査に呼ばれたりするのですが、洋画、日本画、デザイン、写真、彫刻、立体造形などの分野では、大体60歳代以上から90歳、最年少が55歳といった人が応募しています。我々の考えるアートや美術展の美術というものは、もう高齢者のものになっており、それはもう1つの実態を示しています。そういうこともあり、そういった美術に限定して回答をいただいても上滑りすると申し上げました。時代は変わっていますので、平井副会長がおっしゃったように「あなたが考えている文化とは何か」などの項目を作って掘り起こしていかないといけません。今の子どもたちは、アニメも見て評論して、漫画も読んで評論するという文化活動的な、クリエイティブなことは日常的にやっているわけです。その状況をすくいとらないと、今後芦屋市がどうすれば文化都市として生きていけるかという本質が取れない気がします。

(ウイルソン委員)

文化にどういったものがあるか、また私たち若い世代にとっても身近にあるものなんだよ、という説明のようなものはついていてもいいと思います。また、やはり回答が選択式だと、その回答に至った理由が見えてこない部分もあると思いますし、答えている側も質問の意図を理解しきれず回答に迷うときもあると思いますので、自由記述式の部分はあってもいいと思います。

(藤田委員)

大学の学部にしても最近では文学部何々文学科というものはなくなってきており、表現文化学部何々コース何々専攻、あるいは何々語圏文化・文学コースというような区分けがされています。私は文学部で育ったのですが、時代とともに表現も変わっていくのだと、先ほどからお話を伺っていて思いました。

また、資料1の119ページ問26のところですが、「・・・などの文化的な活動を行いましたか」という質問がございます。「行いましたか」と問われると、「文学や詩を書いたかな、音楽を作曲したかな、ピアノ弾いたかな」と考えてしまいますので、「文化的な活動に参加しましたか」とすると、少しやんわりと、「そういえばルネサンス クラシックス芦屋ルナ・ホールで演奏会を聞きに行った」などと結びついてくることもあるのではないかと思います。

(田嶋委員)

先ほど、国は文化を通じて社会包摂のような機能を強化していく方針であるとのお話もありましたが、個人的には文化と言われれば、どちらかというところと日本の伝統文化を子どもに引き継いでいくことが一番大事なのではないかなと思いつつも、社会教育の立場で人のつながりの強化ということになりますと、クラブ活動であったり、スポーツやイベントであったり、手法は様々だと思いますが、そういった選択肢を市民の方へたくさんご提示し、参加していただくことが人のつながりづくりに寄与しますし、大事なことだと思います。今回のアンケートで、「どんなことをしたいですか」などのようなご意見をお聞きできるのであれば、今後、それに合うようなイベントをまずやってみるといったこともできると思います。

(加藤会長)

活発なご意見をありがとうございました。

続いて、議題2です。「文化振興基本計画」の「第5次総合計画（後期）」への統合について、事務局から説明をお願いします。

<井村政策推進課係長より資料2、資料3、資料3－2説明>

(加藤会長)

ありがとうございます。国の動向にどれくらい合わせていくかということもありますが、観光について、芦屋市はどれほど力を入れているのでしょうか。

(事務局)

芦屋市は住宅都市という特徴がございますので、観光資源を有効活用して、インバウンドも引き入れていく方向性というよりは、今まで大事にしてきた芦屋の文化を大事にしていく方向性であると考えております。京都ほどの観光資源はありませんが、ヨドコウ迎賓館が日本酒関連で日本遺産に認められているなど、誇るべき文化資源が芦屋にもございますので、市民の生活に根づいたような生活文化の推進もしていかなければいけません。現在の生活文化を大事にしつつ、その良さを魅力発信していくといったイメージで考えております。

(加藤会長)

アートツーリズムという概念が日本でも導入され、地方都市などでも芸術祭が開催されたりしています。そういう意味では、芦屋はやはり具体美術という大きなブランドがあると思います。インバウンドというわけではないですが、観光旅行でパリへ行った際にオルセー美術館やルーブル美術館を訪れるように、芦屋に来た時にヨドコウ迎賓館だけではなく、市立美術博物館も訪れていただけるような発信の仕方は重要ではないかと思いました。

(事務局)

おっしゃる通り、具体美術は芦屋の文化資源として非常に重要なものですし、芦屋市としても年に1回は必ず具体美術の展覧会も開催しておりますが、発信の仕方などは、今後も引き続き検討していかないとはいけないと思っております。

(岡委員)

観光を推進するのは芦屋には向かないように思います。ツーリストを拒否することはでき

ませんが、それよりも生活圏の充実とか、美化とか、散歩できるまちとか、共存するまちといったものに特化して、来てもらうのが一番大事なことだと思います。芦屋市に観光資源はないと言い切ってしまうのもいいのではないかと。

(加藤会長)

そういう考え方もいいと思います。国の方針に沿ってみんながそちらに向いてしまうというのではなく、国の方針は地域性が考慮されていけませんので、各自治体いろいろ特色があってもいいですね。芦屋は文化に力を入れているけど、それは観光とは切り離しているもので、観光は自分たちの日常の中にある、というような考え方を生み出してもいいと思います。以前、芦屋芸術祭の関係でいろいろと議論をさせていただいた際に、芦屋市民は観光客を呼び込むことより、ふだんの静かな、豊かな生活を楽しむことを希望されていると聞いたりもしました。革新的なまちづくりではなく、今の豊かな景観と生活を守っていくことが1つの大きなニーズであると聞いています。観光に意識が向きすぎて、観光公害が起こるということもありますので、芦屋市は逆に、緩やかな文化というまちづくりの宣言をしてしまってもいいかもしれません。特色や差別化という部分では、芦屋ならではの、芦屋らしさを守っていくことは非常に大事です。

(枝元委員)

外から来てもらう意味での観光では芦屋市は弱いということですよ。もともと芦屋に住んでいる人たちが芦屋の中でドメスティックな観光をして、再発見して、より愛着を深めていくというイメージであると私は理解しました。1つご紹介として、京都にフリーペーパーで「ハンケイ500m」というのがあるのですが、聞いたことはありますか。あるバス停を決め、そこから半径500m圏内にあるお店を取材しているのですが、まずは商品の紹介ではなく、人の紹介という切り口から入っていくんですよ。例えばパン屋さんだとすれば、どういう思いでパンをつくって、どんな商品になっているか、といった人の切り口から始まります。そうすると、もともと知っているお店が出てきて、「あ、知ってる、こんな経緯があったんだ、そういう目でもう一回行ってみよう」と再発見があったりもします。そういったものがなんとフリーで随所に置いてあるというのが面白くて、もしこの辺にないのであれば、インスパイアして似たようなものをやるというのも、いいのではないかと思います。観光というキーワードの中で、そういう取組も念頭に置くのも有効かと思います。

(桑田委員)

結局は見せ方が大事ですね。芦屋には余所に自慢できる文化的財産はすごくありますし、アートツアーなどは市域の狭さを生かしてすごく展開しやすい土地ではあると思うのですが、住んでいる人にとってはうるさかったり、ゴミがでたりして、そっとしておいてほしい人も多いので、「いいものがたくさんありますので、よかったら来ませんか」くらいの見せ方がいいのかもしれない。芦屋らしさは、外部の人が定義すると難しい問題になりますが、「ちょっと品のいい生活」「まち歩きするにはすごくいいまち」「ゆったりといい生活されている方が多い」といった、芦屋の品のよさみたいなものをアピールすれば、十分に人を呼べる他市に劣らないまちだと思います。

(加藤会長)

本日の議題としては、以上になりますが、事務局から何かありますでしょうか。

(事務局)

ありがとうございます。そうしましたら、計画の統合については、本審議会にてご承認をいただきましたので、来年度から作業を進めてまいります。先ほど申し上げましたように統合はされるものの、文化推進基本計画の章は残りますので、引き続き委員の皆さまと一緒に考えていきたいと思っております。来年度以降もどうぞよろしくお願いいたします。

続いて、次年度の組織改正について社会教育室長であります田嶋委員より、ご報告がございます。資料4のその他の参考資料をご覧ください。

(田嶋委員)

令和6年度より、社会教育室の所管部署が市長部局へ移管されます。このことは12月の議会で承認され、この4月の組織改正で移管されることとなっています。

「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」というものがあり、たびたび改正されておまして、もともと社会教育施設などの分野については、教育委員会が所管しなければならないという縛りがあったのですが、改正により教育委員会が所管しなくても構わないといった改正がされております。

今回の移管は資料4にあります通り、谷崎潤一郎記念館、美術博物館、体育館、市民センター、図書館、公民館、これらの大きな施設が市長部局へ移管します。

この移管については、教育委員会で思うようにできなかったから市長部局に移管するというのではなく、市長部局に移管することによって、先ほどもご承認いただきました、いわゆる市のまちづくりの政策とより密接につながり、より住みやすい、住み続けたいまちとして芦屋の魅力を向上させていきたいということで移管が決まっております。

今回、お時間をいただきましたので、この場をもって次年度4月以降の所管についてのご説明とさせていただきますと思います。

(事務局)

4月以降の組織の詳細については、まだ発表されておりませんので、来年度の審議会のときにお示しできればと思います。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

次回の文化推進審議会は令和6年度の7月もしくは8月の開催を予定しております。日程につきましては、時期が近くなりましたら日程の調整等をさせていただきたいと思っております。

本日は、忌憚のないご意見をたくさん頂戴しありがとうございました。事務局で整理をさせていただき、次回はアンケート項目についてご協議をお願いしたいと思います。個別にご相談をさせていただくこともあるかもしれませんが、その際はどうぞよろしくお願いいたします。

(加藤会長)

ありがとうございます。白熱した、すばらしい会議になったと思います。

以上をもちまして、本日の会議を閉会いたします。皆さまお疲れ様でした。